
館に住まう亡霊の影

神崎ミキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

館に住まう亡霊の影

【Nコード】

N4449P

【作者名】

神崎ミキ

【あらすじ】

記憶を無くした少年が出会ったのは奇妙な少女でした。

少女と共にたどり着いたのは、一度踏み入れると出るこの出来ない

『死の森』に怪しげに建つ洋館。

そこにはすでに人がいた。

魔術、儀式、呪い、そして……亡霊。

次々と理解できない事象が少年達を襲う。

そして一人、また一人と忽然と消えていく。

いつたい少年達は……どうなる？

「おい、運転手！ いったい、ここはどこなんや！」

山中を走る一台のバス。

一日に一本しか出ない上に、このバスが行き着く先は、小さな小さな田舎の村。特筆すべき特徴もないのどかな村だ。

村近くに墓地があるぐらいで、バスの利用者の目的も大概がそれだ。

もつとも今は六月、墓参りには少し時期はずれな今日にしては、がらんとしたバスに座る乗客も、幸か不幸か多いほうなのだろう。運転手を含め十人を乗せたバスの窓から見える景色からは、のどかさなど微塵も感じる事ができなかった。

このバスが今走っている場所は、とてもじゃないが道とは呼べる所ではなかった。先程まで有ったはずのアスファルトで舗装された黒い道は、石や砂がむき出しのでこぼこ道となり、バスを揺らしていた。

ガードレールすらない酷く不安定な道。窓から見えるのは、崖のような道の遥か下に果てしなく広がる森の緑一色のみ。

「ねえ……これってちゃんと着くんだよね？」

乗客の一人が、ぽつりと漏らす、それに応える者は誰もいなく、車内は閑静としていた。

「ま、前！」

その静けさを破ったのは、誰かの尋常じゃない程焦った声だった。
「えっ」

その叫びに近い声に、まともな反応を見せる間もなく、バスは忽然と道から姿を消した。

そこには、砂埃が舞い上がるだけだった。

目の前には火に包まれた、さっきまでバスだったモノがあった。何があつたら、こんなコトになるんや」

「バスが道を踏み外して落ちた……んだと思う」

「じゃ、じゃあ、ここは森の中ってことなんですか？ よく……」よく皆無事だった。運転手の彼は、そう言おうとしたのだろう。先程まで走っていた道からは、森まで感覚的に結構距離があつた。少なくとも、小学校の校舎の屋上から地面までの距離以上はあつた。

森の木がクッションの役割でもしたのか、よく誰も死ななかつたものだ。

「まあ、不幸中の幸い、いや、不幸中の不幸って所だね」

「不幸中の……不幸ですか？」

「そ、だってこの森が何て呼ばれてるかぐらい知ってるでしょ」

「……………」

山の周りをぐるりと囲うようにそびえ立つ名もない森。

その森は一度入ると、人はおるか鳥や猫、文字通り虫一匹さえも出て来れないと噂されている。

そのため、この森を知る者はこう呼ぶ。『死の森』と。

この状態を不幸と言った少女の言葉により、皆が沈黙した。

今に限っては、不幸の一つである、バスの燃える音がほんの少しありがたかつた。

「そ、そんなこと言ってる場合じゃないだろ！ 何みんなこれからどうしようみたいな顔してるんだよ！ 決まってるだろ……そんなこと！」

その沈黙の中、一人の青年が大声をあげた。

怒りや恐怖、いろんな感情が混ざり合い困惑した怒鳴り声を。

その青年の手元には、さっき運転手が、皆無事だったと言いよどんだ理由 奇跡的にほとんどが軽傷で済んだ中で、唯一大怪我と呼べてしまう血にまみれた女性が横たわっていた。

「……すみません、一刻も早く彼女を安静にできる所を探さなくち

やいけないのに」

幸い彼女の怪我は、致命傷と言う程ではなく、すぐに病院にでも運んで治療してもらえば大丈夫なレベルだ。

もつとも、治療ができればの話だが。

ここは死の森、いつ出れるか、そもそも出られるのかも分からない、そんな状況で、何をすればいいのか誰も分からない。

「とりあえずここから離れようぜ。火の手が、これ以上広がらない保証もないし、爆発もするかもしれない。森を動き回るのは不安だが、このままじっとしていても危険なだけだ」

行く宛もなく、怪我人を連れて歩くのは、確かに勧めしない。

だが今は、そんなことを言っている暇すらない異常事態なのだ。

「ねえねえ、この赤いのなにー？」

「これは……何かの目印か？」

ウサギのぬいぐるみを抱えた小学生ぐらいの女の子が、一本の木に巻きつけられた赤いリボンのようなモノを指差した。

しかも、よく見ると同じ状態の木が何本もあった。

まるでその印のついた木を繋がば、一本の道ができるかのよう。

「これは、もしかしてアレとちゃうんか、遭難したときにやる」

「つてことは、これをたどっていけば、この森を出られるかも」

何となくだが、皆に生気が戻ったようだ。

だけどこれは、からげんきに近いものに思える。

大丈夫かも知れないと思いきみでもしなければ、まともな精神を保てないのかもしれない。

だって、この森から出られた者は一人もいないのだから。

赤い印を見つけないが、一同は歩みを進めていく。
会話は無い。

バスから遠く離れ、一同の足音だけが耳に入る。

「おい、次の印はどこだ！？」

十分ほど、いやこれはあくまで体感時間での話だが、それぐらい

歩き続けたところで、今まで頼りにしていた赤い印を見失った。

「ちょ、ちよつとどこに……？」

皆が印のついた木がないか探している中、ウサギの女の子が何かに気づいたようだ。

「これって……」

女の子の後を追ってきた青年の目の前には、緑一色の森の中に違和感なくひっそりと建つ古い洋館があった。

「なんや……これは？」

「森の中にこんなものがあるなんて……」

「なるほど、印はこの建物にたどり着くためのモノだったてことか」
更に後を追ってきた人たちが口々に感想を述べる。

「はは……これで何とかなるかも」

怪我した女性を抱える青年が、安堵の声を漏らす。

「とりあえずあがらせてもらおうぜ。人がいるか分からんが」

そうして、館の扉がきしむような音をたてて開かれる。

どうやら鍵はかかっていたいなかったようだ。

館の中を見るが、真っ暗で、人が住んでいる気配は感じられない。

とりあえず、一同が館に入ると　寸前まで真っ暗だった館に光が灯った。

天井に飾られたシャンデリアに電気がついたらしい。

さっきまで、森の中も含め長く光を見ていなかったため少しまぶしい。

でも、どうして灯りがついたんだろうか。

やはり、一見誰も住んでなさそうなこの館にも、人はいるんだろうか。

誰も言葉をしない中、外から雨音が聞こえる。

結構きつそうだ。

だが、気のせいだろうか。

雨音に紛れて、何か別の音が　そう、まるで

「へえ、こんなところに人が居るなんてね」

誰かの足音が聞こえたのは。

「これからどうしよう……」

現在、僕は絶賛遭難中だった。

気がつくと、そこは知らない場所だった。あたりを見渡しても木しか見当たらない深い森。空さえも見えず薄暗い不気味な感じだ。じっとしていても無駄だと思い、とりあえず歩くことにしたのだが……結果は何も変わらなかった。ひたすら木が有るだけ。ぐるぐると同じ場所を回っている気さえした。

ここはどこなんだろうか？

どうしてここに居るんだろうか？

そもそも僕は誰なんだろうか？

様々な疑問が、頭の中をぐるぐると巡る。

いくら考えても、何一つ答えは分らない。

何故なら僕には『記憶』がないのだから。

「こんなとこで何してんの？」

しばらく森をさまよっていると何処からか声が聞こえた。

誰か居るのだろうか？

辺りを見回してみるが成果はない。

僕が言うのもなんだが、こんな森に人がいる訳がない。

空耳だったんだろう。

「おい、無視ー？」

……………。

再び首を回すが、やはり誰もいない。

「下を見るー」

下？

「後ろを見るー」

後ろ？

「上を見るー」

上……って!?

「ざまあ見る？」

既に声の主を探す必要は無くなった。

何故なら、その人物は突然上から現れ、ドロップキックをかましてきたのだから。

「痛たた……」

僕は尻餅をつき、痛みに襲われていた。ろっ骨の辺りがズキズキする。幸い折れてはなさそうだが。

「へえ、痛いんだー」

ダメージを与えた当人は、謝りすらせず僕を眺めていた。

しかし何処から現れたのかは知らないが、上空からドロップキックをくらって無事である訳がない。

むしろ、この程度で済んでラッキーなぐらいだ。

普通は、謝罪はともかく、せめて心配ぐらいするものだと思うのだが。

「で、こんな何もない森で何してるの？」

改めて問いかけてくるドロップキックの人もとい謎の女性。

彼女の存在は、この暗い森の中、ひどく場違いに感じた。

その原因は、おそらく……というか間違いなく、彼女の格好だろう。

まるで近所のコンビニにでもふらつと行くみたいな格好。

服装は上下黒のジャージ。長い髪は後ろで縛られている。

とてもじゃないが、森を歩く格好とは思えない。

「えっと……遭難中？」

取りあえず質問に応えようと試みたが、何故か疑問形になってしまった。

まあ、僕自身が現状を理解できていないのは事実。

例え客観的にはどう見ても遭難者だったとしても、果たしてそれ

が正しいのかを冷静に判断するのは、記憶の無い僕には難しい。

「へえー、記憶がないんだ？」

「!? ちょっとドキツとした。」

落ち着いてみると、さっきまで自分の口が動いていたことに気づく。

どうやら、ぶつぶつと独り言を呟いていたようだ。

独り言を聞かれるのは恥ずかしい、何より不気味がられていないか不安だ。

「記憶が無いって具体的にどういうことなの？ ドラマとかでよくあるやつ？」

「うーん……分からない。気がついたらここにいた、それまでのことはさっぱり」

どうやら彼女は不気味がる以前に、記憶が無いことに興味を持っていたらしい。

「……それはいいんだが、いつまで僕に乗っているんだろうか。いい加減重い。」

「何も覚えてないってことか……名前は？」

「分からない」

速答する。

なんせ記憶が無いことに確信を持った理由がそれだからな。

ここはどこか、どうしてここに居るのか。

それに続くように様々な疑問が頭を駆け巡り、ふと思った。

『僕は誰だろう』と。

いくら考えても当然のように答えは出ない。

そうして気づいた、僕は記憶が無いんだと。

「ふーん、本当に記憶喪失なのか」

興味深そうに僕の目をじっと見る。

「原因は色々あるみたいだけど、状況から察するに……人生が嫌になり自殺を図るが失敗、そのショックで記憶喪失ってところかなるほど」

「なんで!？」

「いやだって、この森って死の森って言われててさ、滅多に人は近寄らないんだよ。そんな森に一人ではいるなんて自殺としか考えられないよー」

「えー……」

もしかしたら自分は人生に絶望した自殺志願者だったかもしれない。

考えるだけで怖くなる。背筋がぞつとする。

「ドラマとかでよくやってる記憶喪失ってさ、全生活史健忘って言うて多くは、精神的ショックとかストレス、まれに頭を怪我したりして発症するらしいよ」

言われて思わず頭を擦る。傷のようなものは見当たらない。つまり自殺ではないにしろ、何かが僕にあった確立は高いのだろう。

記憶を失うぐらいの何かが。

「ま、とりあえず歩こうか。じっとしてても何だしー」

彼女は、ようやく僕から立ち上がりジャージのズボンを手で払う。同時に僕も開放され、同じように服をはたく。

意外と汚れていなかったので大して手間はかからなかった。

「いくあてはあるの？」

「ないよー」

もしかしたらと思ったのだが、実際は遭難者が一人増えただけである。

「……飛鳥」

「え？」

「あたしの名前。分からなかったら不便でしょ」

「そ、そうだね」

いきなり呟くので何事かと思った。

確かに名前を知っていた方がいいか。

いざって時に、『あれ誰だったけ?』てなったら大変だ。

「で、あなたの名前は……無かったんだっけ」
そう現在僕は名無し。

例えば、彼女だけが運良く森から出れたとしても、誰かに遭った
としか伝えられない。

やっぱり名前は大事だな。無いと面倒だ。

「じゃ、今からあなたはユウね」

「え？」

「どうしたの？ 行くよユウ」

「あの……ユウって何？」

「あなたの名前」

「何で！？」

「何となく」

「えー……」

「迷い人Aのが良かった？ 他にはさまよう旅人とかあったけど」

「……ユウでいいです」

「じゃ、行ってー」

何だか分からない内に僕の名前が決まってしまった。

どうでもいいことだけど、彼女……飛鳥の提示した例がことな
くどこそのRPG的ネーミングに思えた。

てきとうにうるうるしてたら敵にエンカウントしそうだ。

「んー、雨かー」

飛鳥が手のひらを上に向け、ぽつぽつと降り始めた雨を確かめる。
「これ土砂降りになりそうだなー。急ぐ？」

「いやいや『急ぐ？』ってどこに……」

「ねえねえ飛鳥さん飛鳥さん、あれは何ですか？」

思わず僕が指差す先には、この暗い森の中で仄かに灯る光だった。
よく見ると古びた洋館のようで、森に溶け込みひっそりと、そこ
に建っていた。明かりがついていなければ、近くを通っても見過ご
していたかも知れない。
「次から次ぎへと……」

飛鳥が何かを呟いているがよく聞こえない。

どうせ独り言だろうから、放っておこう。

独り言って聞かれたくないからな。無意識に変なことを言ったら尚更だ。しかし、気のせいか嬉しそうだが……まあ、当然か。

駄目かも知れないと思っていたところで、助かる希望が見つかったんだ。

僕もちよっぴり安心し、同じに期待している。

飛鳥は館へと、一步一步進んでいく。

そして、すでに開かれている扉の前までたどり着くと、ニヤツと笑い

「へー、こんな所に人が居るなんてね」

大層嬉しそうに言い放った。

気がつくと、雨は飛鳥が言っていたとおりに土砂降りになっており、僕の体を冷やしていた。

そして頭が冷え冷静になってみると、こんな森にひっそりと建つ洋館に不気味さを感じずにはいらなかった。

一度入れば出ることを許されない死の森に怪しげに建つ洋館

『なんなんだよ、これ……』

それは当然の如く、ただの洋館ではなかった

『ようやくこの時が来たか……』

そこに迷い込んだ十二人

『十二の命を捧げ……儀式は完成する！』

魔術、儀式、呪い、理解の許容量を越えた現実が次々と彼らを襲う

『此処は亡霊の住まう館、唯の一人も逃れることなど出来はしない』

亡霊は存在するのか、この館は何なのか、一体何が起きているのか

『生きてやる……僕は絶対に生きて、そして此処を出る！』

立ち向かうは記憶無き少年ユウ

彼らの未来は何処にあるのだろうか

明日はあるのだろうか

それは誰にも分からない

（後書き）

予告もといプロローグ。

アイディアが浮かびプロットが出来たのですが、本文を書き上げるのには手間がかかるので、とりあえずプロローグのみを投稿してみました。

感想、ご指摘などがあればお願いします。

より良い作品ができるように頑張りたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4449p/>

館に住まう亡霊の影

2011年8月21日03時32分発行